答え合わせの時にもう私はいない

　昨日のペンネーム「ダブルレインボー」さんからのお便りにあった、もう一曲の「正解」も聞いてみました。

最後の「答え合わせの時に私はもういない」にハッとさせられるのと同時に、親として、その先の息子の幸せを強く願うとともに、その時までに息子に伝え、教えられることは何かなと考えさせられます。 　よかったら是非お時間ある時に歌詞をじっくり聴いてみてください。

　「その時までに伝えられること、教えられること」という部分、とても深く共感しました。
　私も、残りの人生で子どもたちに伝えられることは何かと考えることが、非常に多いからです。
　だからこそ、そんな時間やチャンスがあれば、積極的に活用することにしています。

　最近は、ほぼ毎日二人の小学生の娘と一緒に家を出て、歩いて通勤・通学をしています。
　5 分ほど歩いたところで娘たちは駅から電車に乗り、私はそのまま徒歩で 30 分ほど歩いて学校まで通っているのですが、この「5 分」が最近とても貴重だなと思って色んな話をしているところです。
　つい先日は、こんな話をしながら登校しました。
　「自分にとって一番身近な人間って誰だと思う？」
と私が尋ねて、二人の娘がうーんと考えるところから会話が始まりました。
　ベースにしたのは、来月発売予定の新著の「おわりに」に書いた一節です。
　一部だけを抜粋で紹介します。

おわりに

「貴方にとって一番身近な人間は誰ですか」
そのように問われたら、みなさんはなんと答えるでしょうか。
親と答えるでしょうか。
我が子と答えるでしょうか。
それとも配偶者や友人と答えるでしょうか。
もちろん、そうした存在が身近であることは間違いありませんが、更に近い位置にいる人間がもう一人だけ存在します。
それは、自分です。
物心ついたときから２４時間、３６５日、もっとも身近な人間として付き合い続けているのが、自分という存在です。
近過ぎるが故に、その存在について改めて考えることは少ないかもしれません。
そして、自分のことを心底「変わった人」と認識している人も多くはないでしょう。
四六時中、何十年と連れ添った最も近い人間だからこそ、その存在をどこか「当たり前」や「普通」のものとしてたいていは認識しているはずです。
だからこそ、自分では自分という存在の特異性や持ち味には中々気づけません。
本当は様々な色や香りを放っているにもかかわらず、「当たり前」「普通」と認識することによって、まるで空気かのように無味無臭な存在と捉えてしまうケースが少なくないということです。
そのことを、私は本書の制作過程を通して改めて目の当たりにしました。
インタビュワーのお二人からの質問に私が返した諸々の回答。
その答えの内容は、いずれも私にとってはごくごく自然なものでした。
「それはなぜか」と思考の理由を問われても、「なぜかそのように思えた」という粗い答えしか浮かばなかったこともしばしば起きました。
そんな風に当たり前だとすら思っていた感覚を丁寧に掘り下げ、そこに存在している価値に改めて気づかせてくれたのが北山氏と福田氏でした。
「自分自身を深く掘る体験」には、大きな幸福感や充実感が伴うことを改めて感じさせてくれたのも両氏であったように思います。
もちろん、これと似たような体験をお持ちの人は、他にもきっと多いはずです。

「あなたって結構〇〇だよね」
「普通そんな風には出来ないよ」
「なんで〇〇のように感じられるの」
自分一人では気づきにくい自身の特異性が、他者との関係の中で明らかになる。
当たり前のように思えていた「自分」というピースの独特な形が、他者と重なった瞬間に「違い」として浮かび上がってくる。
そのような場面に遭遇できることは、自分自身に大きなチャンスをもたらします。
他者との違いにこそ、自分の強みや持ち味が潜んでいる可能性が高いからです。

どの人間にも、必ず凸凹が存在します。
そして「人は長所で尊敬されて短所で愛される」という言葉があるように、その凸と凹の両面に大切な意味があるのだと思います。
ともすれば、多数派から外れることを恐れ、「人並み」「普通」という言葉に安心し、人との違いをどこか恐れる風潮が存在する昨今。
そうした状況において、これだけ「違い」をクローズアップしていただき、深く掘り下げて価値を見出してもらえたことは本当に幸せな体験でした。（攻略）

つまりは、「自分というものをどのように認識するか」ということと、「その強みをどのようにすれば見つけていくことができるか」という話をしながら登校したということです。
もちろん小学生向けに内容は易しく砕きながら、会話のラリーを楽しみつつ伝えていく形です。
教室でも、次のような話をして「違い」について語ることがあります。

「みんなは普通ですか？それとも変人ですか？」
子どもたちのほとんどは、決まって「普通」に手をあげます。
その上でさらに尋ねます。
「『普通』ってどういうことですか？」
すると子どもたちは答えます。
「まじめなことです。」

すぐさま全体に聞き返します。
「『まじめ』が『普通』ということなんですね。」
こうやって改めて聞き直すと、「それは違うかぁ」となります。
同様のラリーを何度か行うと、子どもたちから声が上がります。
「全員変人だ！」と。
その通り。
「普通」とは、多くの人が作り上げた幻です。
世の中の真実は、「全員変人」なのです。そもそも普通が存在しないのですから。
〇〇さんも変人、〇〇さんも変人、〇〇先生も変人です。

このような話を朝の会などで簡単に語り聞かせた上で、

「今日もそんな変人集団の皆さんと共に、楽しく学んでいきましょう。」

と語ると、どの子も笑います。
そんな風にして、最終的には「違いを認める」ところから「違いを楽しむ」段階に移行できればまた新たなステージへと進めたらと考えています。
先ほどの娘たちとの登校シーンでも、
「〇〇は自分のことを普通だと思う？変人だと思う？」
と尋ねると、二人とも「結構変人だと思う」と笑いながら話していました。
そして、どんなところが「変わっている」と思うかを話しながら登校していたという日がありました。
ちなみに、「お父さんは普通だと思う？変人だと思う？」と聞くと、二人とも声を大にして「ものすごい変人！」と笑いながら答えてくれました。
上の娘に至っては、「変人のオーラが出てるよ」とも。
「同じを求め、違いを認めず」という風潮の強い国だからこそ、その「違いの見つけ方・楽しみ方」を伝えてあげたいと思っているところです。

それから、我が家では基本方針として「読書」の楽しさを子どもたち全員に感じさせてあげたいということを夫婦でよく話します。
「子どもに読書の習慣をつけることは、数千万円の財産を残すことよりも価値あること」と、昔々から言い伝えられてきました。
子どもたちが苦境に立った時に近くに自分がいられなかったとしても、本の中にその答えを見つけられるようになってくれたら…とそんな願いでしばしば子どもたちと本屋や図書館に行きます。

ちなみに、「好きな本を◯冊買ってきていいよ」が本屋での我が家の定番のやり取りです。
子どもたちはルンルンで本を選びます。
この時間が凄く好きみたいなので、私はそっと視界から消えることにしています。
最近は「1 冊は定番で、もう一冊は全然手を出したことのないジャンルに挑戦！」のような感じで、本の選び方にも色んな個性が出てくるようになりました。
「自分で選ぶと好きになる」は読書以外でもきっとそうなのだと思います。
近くにいれる時に「伝えたいこと」「教えたいこと」、みなさんはどのようなことを考えているのか、またいろいろと聞かせてもらえると嬉しいです。

1 学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ (google.com)

https://www.youtube.com/watch?v=ow5FBOBAdhU

この先に出会うどんな友とも　分かち合えない秘密を共にした
それなのにたったひと言の　「ごめんね」だけ
やけに遠くて言えなかったり

明日も会うのになぜか僕らは　眠い眼こすり　夜通しバカ話
明くる日　案の定　机並べて居眠りして　怒られてるのに笑えてきて

理屈に合わないことを　どれだけやれるかが青春だとでも
どこかで僕ら思っていたのかな

あぁ　答えがある問いばかりを　教わってきたよ　そのせいだろうか
僕たちが知りたかったのは　いつも正解などまだ銀河にもない

一番大切な君と　仲直りの仕方
大好きなあの子の　心の振り向かせ方
なに一つ見えない　僕らの未来だから
答えがすでにある　問いなんかに用などはない

これまで出逢ったどんな友とも　違う君に見つけてもらった
自分をはじめて好きになれたの　分かるはずない

君に分かるはずもないでしょう

並んで歩けど　どこかで追い続けていた　君の背中
明日からは　もうそこにはない

あぁ　答えがある問いばかりを　教わってきたよ　そのせいだろうか
僕たちが知りたかったのは　いつも正解など大人も知らない

喜びが溢れて止まらない　夜の眠り方
悔しさで滲んだ　心の傷の治し方
傷ついた友の　励まし方

あなたとはじめて怒鳴り合った日　あとで聞いたよ　君は笑っていたと
想いの伝え方がわからない　僕の心　君は無理矢理こじ開けたの

あぁ　答えがある問いばかりを　教わってきたよ　だけど明日からは
僕だけの正解をいざ　探しにゆくんだ　また逢う日まで

次の空欄に当てはまる言葉を
書き入れなさい　ここでの最後の問い

「君のいない　明日からの日々を
僕は／私は　きっと」

制限時間は　あなたのこれからの人生
解答用紙は　あなたのこれからの人生
答え合わせの　時に私はもういない
だから　採点基準は　あなたのこれからの人生

「よーい、はじめ」